

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770038

研究課題名(和文)「われ感触す、ゆえにわれ在り」の系譜 ヘルダーからメルロ＝ポンティまで

研究課題名(英文)Genealogy of "Sentio, ergo sum": From Herder to Merleau-Ponty

研究代表者

杉山 卓史 (Sugiyama, Takashi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90644972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、哲学・美学史上散発する「われ感触す、ゆえにわれ在り(Sentio, ergo sum)」、すなわち、人間存在の本質は触れ感じることにあり、とする思想を系譜化した。この思想の重要な提唱者としてヘルダー、リーグルそしてメルロ＝ポンティの三者を取り上げて(再)検討し、この三者間のつながりを明らかにすることにより、この思想を近代哲学・科学の出発点であると同時に限界でもあるデカルトの「われ思う、ゆえにわれ在り(Cogito, ergo sum)」のオルタナティブとして位置づけた。

研究成果の概要(英文)：This study examined a series of thoughts supported by the motto "Sentio, ergo sum (I feel, therefore I am)" - that the essence of the human existence lies in the Feeling - genealogically. Focusing on Johann Gottfried Herder, Alois Riegl and Maurice Merleau-Ponty as the advocates of this thought and making the relation among them, the study put this thought as an alternative of the Cartesian "Cogito, ergo sum (I think, therefore I am)", which is the starting point as well the limit of the modern philosophy and science.

研究分野：美学

キーワード：ヘルダー リーグル メルロ＝ポンティ デカルト 侵入不可能性 触覚

1. 研究開始当初の背景

研究課題名に掲げた「われ感触す、ゆえにわれ在り」はラテン語“sentio, ergo sum”の訳である。言うまでもなく、デカルトの「われ思う、ゆえにわれ在り(cogito, ergo sum)」を拵ったものである。デカルトが方法的懐疑の末に辿り着いたこの一文は、人間精神の本質を思惟のはたらきに定位したことによって近代哲学の出発点となったのみならず、思惟から切り離された物質的延長を計量可能な観察対象としたことによって近代科学の出発点ともなった。しかし、それから4世紀近くを経た今日、その行き詰まりが環境破壊をはじめとするさまざまな形で噴出してきており、現代哲学はこのような状況への対応を迫られている。後期ハイデッガーの技術(批判)論や、最近では梅原猛の日本・東洋の伝統的思想に基づく「人類哲学」の構想などは、その一例であろう。しかし、デカルト的な人間中心主義を克服・修正する途は、これらに尽きるものではなく、いまだ十分に顧みられていないものがある。それが「われ思う、ゆえにわれ在り」へのアンチテーゼとして提唱された「われ感触す、ゆえにわれ在り」、すなわち、人間存在の本質は(主として自らの身体を)触れ感じることにあり、とする思想である。主唱者はヘルダー(ともに1769年執筆の遺稿『批判論叢』第4集および「触覚について」において)であるが、19世紀以降もこれを意識的にせよ無意識的にせよ継承する思想が少なからず出現している。

こうした背景から、本研究は「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想を系譜化することを目的として、遂行された。

2. 研究の目的

「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想は、20世紀後半以降においても出現しているが、本研究では前述のヘルダーから「私はヘルダーとともに『人間は永続する共通感覚器官である』と言いたい」(『知覚の現象学』1945年)と述べて「ヘルダー・ルネサンス」をもたらしたメルロ＝ポンティまでに絞って「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想の系譜化を試みた。具体的には、以下の諸点の解明を目指した。

(1)ヘルダーが1769年に「われ感触す、ゆえにわれ在り」と発言するに至った経緯を、デカルト哲学の批判的受容として解明する。

(2)リーゲルが『末期ローマの美術工芸』(1901年)において提示した「触覚(的)から視覚(的)へ」という美術史の発展図式における「触覚」の位置づけを明らかにする。さらに、彼の活動時期は、「われ感触す、ゆえにわれ在り」の発言を含むヘルダーの遺稿がズプハン版全集として公になった(1878年)直後である。これに鑑み、リーゲルの理論の成立過程を、ドイツ語圏におけるヘルダーの再評価の流れとの関係を仮説として想

定しつつ、明らかにする。

(3)直接には「われ感触す、ゆえにわれ在り」という言葉を残さなかったメルロ＝ポンティの身体哲学を、「私はヘルダーとともに『人間は永続する共通感覚器官である』と言いたい」と述べた『知覚の現象学』を軸に、これを遺稿集『見えるものと見えないもの』における「肉」の概念によって補いながら、「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想の復権として再解釈する。彼の哲学はフッサールの「われ思う」偏重の現象学の批判的継承という側面を持っている、すなわち、フッサールとメルロ＝ポンティとの関係はデカルトとヘルダーとの関係に並行的であるがゆえに、この課題は重要である。ただしメルロ＝ポンティは、「私はヘルダーとともに『人間は永続する共通感覚器官である』と言いたい」という発言を、ヴェルナーからの引用という形で述べている。そのため、ヴェルナーの心理学についての検討が必要となるが、これは当時のハンブルク大学における同僚たち哲学者カッシーラー、美術史家パノフスキー等との交流なしには成立しえなかったものである。それゆえ、ヴェルナーのみならず、このヴァールブルク学派におけるヘルダー受容を明らかにしてメルロ＝ポンティの身体哲学の背景に位置づける。

3. 研究の方法

(1)ヘルダーにおける「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想の成立過程を、関連文献の精読によって解明する。まず、『批判論叢』第4集と「触覚について」の、それぞれの行論における「われ感触す、ゆえにわれ在り」発言の位置づけについて検討する。次いで、1769年以前のテキスト——「デカルトは『われ思う、ゆえにわれ在り』という誤謬推論を犯した」という記述が見られる『存在試論』(1763年)等——におけるデカルトへの言及を検討する。次いで、ヘルダーの師カントの『視霊者の夢』(1766年)における「私が感覚するところに私は存在する(Wo ich empfinde, da bin ich)」という、本研究にとってきわめて注目すべき——『純粹理性批判』第2版(1787年)における「われ思う」＝超越論的統覚の強調を知る者にとっては奇異に見える——主張を、同書に対するヘルダーの詳細な書評を通じて、検討する。

(2)リーゲルの美術史学における「触覚」の位置づけとその起源を解明する。まず、『末期ローマの美術工芸』における「触覚」の位置づけを明らかにする。次いで、以上のような理論形成における「触覚」概念の導入経緯を解明する。彼が『末期ローマの美術工芸』において「触覚」「視覚」の対概念を導入するに際して唯一依拠しているのがジーゲルの『空間表象の発展』(1899年)であり、そのジーゲルが後に(1907年)『哲学者としてのヘルダー』という書を著していることを、手がかりとして進める。

(3)メルロ＝ポンティの身体哲学の再解釈とその成立におけるヴァールブルク学派の影響の解明を遂行する。まず、主として『知覚の現象学』に即して、ただし必要に応じて『見えるものと見えないもの』および講義録「幼児の対人関係」(1950-51年)をも参照しながら、メルロ＝ポンティの「われ感触す、ゆえにわれ在り」の思想を フッサールの「われ思う」＝超越論的主観性の現象学と対比しつつ 素描する。次いで、その成立におけるヴァールブルク学派の影響を明らかにする。メルロ＝ポンティの「私はヘルダーとともに『人間は永続する共通感覚器官である(L'homme est un sensorium commune perpétuel)』と言いたい」という発言は「ヘルダー・ルネサンス」をもたらしたが、実際にヘルダーが残しているのは「われわれは思惟する共通感覚器官である(Wir sind ein denkendes sensorium commune)」という発言である(『言語起源論』1772年)。この「永続する」と「思惟する」との「誤引用」は、引用元であるヴェルナーの『感覚研究』(1930年)において、すでに発生している。これは、単なるケアレスミスなのか、あるいは意図的な「生産的誤引用」なのか。そもそも、ヴェルナー(及びメルロ＝ポンティ)においてヘルダーという思想家はいかなる位置を占めているのか。ヴェルナーに関する文献調査を通じて、この問いに回答する。

4. 研究成果

(1)ヘルダーにおける「われ感触す、ゆえにわれ在り(Sentio, ergo sum)」という主張の成立過程について、以下の点を明らかにした。まず『触覚という感官について』における「われ感ず、ゆえにわれ在り」は、狭義にはモリヌクス問題の文脈で言われているが、広義には物質の侵入不可能性を感知することが「哲学の最高概念」である、という、前批判期カントから受け継いだ主張から言われている。そのカントは、この「侵入不可能性」概念を用いた思考実験によって心身問題を批判し、この問題には「私の感覚するところに私は存在する」という仮の回答しか与えられない、とした。これに不満を感じたヘルダーは、「霊的侵入不可能性」という反証をもって師を批判し、師の「仮の」回答を(微修正した上で)「哲学の最高概念」に格上げしたのである。他方、『批判論叢』第四集における「われ感ず、ゆえにわれ在り」は、クルージュウス批判の帰結、すなわち、「われ思う、ゆえにわれ在り」は「われ思うことを意識す、ゆえにわれ在り」でなければならない、とデカルトを批判するクルージュウスを、さらに推論の形式面から批判したことの帰結である。ここには、「存在」は分解不可能な、あるがままに「感覚」するしかない概念である、という主張が控えている。このようにまとめてみるならば、ヘルダーは「われ思う、ゆえにわれ在り」を、『触覚という感官について』

系列では内容的に、『批判論叢』第四集系列では形式的に、それぞれ批判している、と言える。すなわち、両者はデカルト批判という目的/背景を、異なる側面からカントおよびクルージュウスを介して間接的にはあるが、ゆるやかに共有している。

(2)リーゲルが『末期ローマの美術工芸』において提示している「触覚(的)から視覚(的)へ」という美術史の発展図式における触覚概念と、ヘルダーの触覚概念との間を、文献学的に架橋した。リーゲルは触覚的 視覚的の対概念を導入するに際して、新カント派の哲学者ジーゲルの『空間表象の発展』(1899年)に唯一の先行研究として言及しているが、このジーゲルが後に『哲学者としてのヘルダー』(1907年)という書を著しており、両者は共通する内容を含んでいるため、前後関係が逆であるという意味で間接的ながらも、ジーゲルを介したヘルダーからリーゲルへの影響関係を指摘できる。ただし、ジーゲルの二著に共通する内容とは、ヘルダーの『彫塑』(1778年)における触覚論ではなく『純粹理性批判のメタクリティーク』(1799年)における反カント的空間論であり、その点で当初立てた仮説は修正を迫られた。

(3)メルロ＝ポンティの「私はヘルダーとともに『人間は永続する共通感覚器官である』と言いたい」という発言は「ヘルダー・ルネサンス」をもたらしたが、実際にヘルダーが残しているのは「われわれは思惟する共通感覚器官である」という発言である。メルロ＝ポンティは、意図的に誤引用したのか?否である。なぜなら、メルロ＝ポンティはヘルダーから直接にはなくヴェルナーの『感覚研究』(1930年)から「孫引き」しているが、ヴェルナーにおいてすでに誤引用は発生しているからである。この誤引用は、ヴァイマル共和政時代に新設されたハンブルク大学を舞台に展開された「ヴァールブルク学派」とりわけカッシーラーの興味深い研究方法の一端を示している。しかしこのことは、ヘルダーが決して「われわれは永続する共通感覚器官である」と述べなかったであろうことを意味しない。なぜなら彼は、晩年の『メタクリティーク』において実際に「われわれの内部は、あらゆる感官の持続する共通感覚器官となる」と述べているからである。その意味でヴェルナーもメルロ＝ポンティも、ヘルダーを誤引用・誤解していたとは必ずしも言えない。むしろ、従来注目されてこなかったヘルダー晩年のカント批判における共通感覚器官の役割にわれわれの目を向けさせるという点で、この「誤引用」に注目することは有意義である、とさえ言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

杉山 卓史、「われ感ず、ゆえにわれ在り」
のヘルダーにおける成立、美学、査読有、
第66巻第1号、2015、53-64
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009976464>

〔学会発表〕(計 3件)

SUGIYAMA, Takashi, What Kind of
Sensorium Commune Are We? Herder
after Merleau-Ponty, 20th
International Congress of Aesthetics,
26 July 2016, Seoul (Republic of
Korea).

杉山 卓史、ヘルダーからリーグルへ―
触覚論の系譜の一断面―、日本独文学会
2015年秋季研究発表会、2015年10月4
日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

杉山 卓史、「われ感ず、ゆえにわれ在り」
のヘルダーにおける成立、平成26年度第
4回美学会東部会例会、2014年12月6
日、東京大学(東京都文京区)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉山 卓史(SUGIYAMA, Takashi)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90644972